# 源氏物語の住文化とその受容史に関する研究

— 理想の住空間としての建築・しつらい・作庭 -

主査 森田 直美\*<sup>1</sup> 委員 赤澤 真理\*<sup>2</sup>, 伊永 陽子\*<sup>3</sup>,

本研究は、『源氏物語』の舞台となった寝殿造の空間が、中近世を通してどのように理解されたか、中近世における『源氏物語』の住宅考証史を通して明らかにする。15 世紀『花鳥余情』は、同時代の住空間を背景に、文献上で寝殿造の復原を試みる。 15 世紀『源氏物語人々居所』及び17 世紀『十帖源氏』は、六条院の作図を試みるが、寝殿と対からなる構成を描出できていない。しかし、そこには当時の人々の『源氏物語』の庭と庭を舞台とした遊興への関心を見出すことができる。その後、18 世紀後半松岡行義著『源語図抄』『源氏類聚抄』は、裏松固禅『大内裏図考証』『院宮及私第図』を典拠とし、寝殿造像を視覚的に表現することが可能となった。

**キーワード**: 1)源氏物語, 2)平安文学, 3)有職故実, 4)寝殿造, 5)装束, 6)松岡行義, 7)裏松固禅, 8)花鳥余情, 9)源語図抄, 10)源氏類聚抄,

# RESEARCH ON THE DWELLING CULUTURE OF THE TALE OF GENJI AND ITS HISTORY OF RECEPTION

Architecture, Furnishing and Garden as an Ideal Image

Ch. Naomi Morita

Mem. Mari Akazawa, Yoko Korenaga,

In this research we aim to clarify how the people in the middle ages and early modern ages had comprehended Shinden-zukuri of ancient time and constructed their ideal image of living space, through the study on The Tale of genji during the middle ages and early modern period. *Kacho-yosei* attempted to study the restoration of Shinden-zukuri in the 15th century but contains the architectural understandings of the middle ages. The drawings of *Rokujyo-in* the 15th and 17th century attempted to draw the Shinden, but failed to draw the correct formation of Shinden-zukuri. *Gengo-zushou* and *Genji-Ruijyushou* produced by *Matsuoka yukiyoshi* in the 19th century enabled the visual restoration of Shinden-zukuri by using *Uramatsu Kozen's* study.

# 1. はじめに

『源氏物語』は、平安時代 11 世紀に成立した日本を代表する長編小説である。2008 年は、物語が文献上に登場してから千年の節目にあり、各地で『源氏物語』に関わる特別展示などが開催された。これら催しにおいては、物語が古代のみならず、中近世、近代を経て現代に至るまでいかに受容されてきたのかに、関心が寄せられた<sup>文1)</sup>。

『源氏物語』は、中近世の文学・芸能・美術工芸・建築・庭園などの文化創造に役割を果しており、その日本文化における存在様態を明らかにするためには、古代とともに中近世における受容の展開を検討する必要性が、新たに研究者間で、認識されるようになったためである。

本研究は、古代から近世までの『源氏物語』の住宅考証を住宅史の立場から検討し、『源氏物語』に示された 住文化とその日本住宅史における意義を再検討する。

具体的には,中近世の住宅考証史の中で,文献上で

住宅・しつらいを考証した 14 世紀『河海抄』,15 世紀『花鳥余情』に示された寝殿造像を明らかにする (4章)。また 15 世紀,17 世紀に作図化された六条院の図の精度と関心の所在を明らかにする (第5章)。そして19 世紀に松岡行義が編纂した『源氏物語』住宅考証書の成立に着目し (第6章),近代までの展開を明らかにする (第7章)。以上をふまえ,本研究は,『源氏物語』から生み出された住宅像が,中近世においてどのように共有され,具体化・視覚化されていくのかを究明する。

### 2. 研究の資料について

本研究は、建築史を専攻する赤澤、本研究を推進する上で基礎となる国文学を専攻する森田、住宅と並ぶ有職故実である服飾史を専攻する伊永の3人で共同研究を推進した。研究の資料として、『源氏物語』の建築・調度・装束に関する記述を抽出し、データ化した<sup>文2)注1</sup>。

 $<sup>^{*\,1}</sup>$ 人間文化研究機構 国文学研究資料館 研究部 機関研究員・博士 (文学)

 $<sup>^{*\,2}</sup>$ 日本学術振興会特別研究員 SPD・博士(工学)(当時 人間文化研究機構 国文学研究資料館 展示企画室 機関研究員)

<sup>\*3</sup> 文化女子大学文化ファッション研究機構 共同研究員・修士(生活科学)

表 1-1 本研究で調査した資料(本稿で対象とした書を色で示す)

X · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·							
調査日時		書名	員数	年代	作者	所蔵	
2009年	6月	源語図式抄	-#	_	森生	大阪府立中之島図書館	
	7月	源語図集	-#	1847年	松岡行義	宮内庁書陵部	
	7月	源氏類聚抄	四冊	19世紀	松岡行義	宮内庁書陵部	
	10月	源語図抄(写)	-#	_	_	京都大学文学部図書館	
	10月	源氏物語考証釈図	二冊	1891年	有佳斎	国会図書館	
	10月	源語問答	-#	19世紀	松岡行義	宮内庁書陵部	
	11月	十帖源氏(六条院図)	-#	17世紀	野々口立圃	国文学研究資料館	
	11月	源氏装束図式文化考	-#	_	中野貞利	国文学研究資料館	
2010年	6月	源語図集(写)	-#	1888年	山田衛居周辺	三重県立斎宮歴史博物館	
	6月	勢語図抄(写)	-#	_	山田衛居周辺	三重県立斎宮歴史博物館	
	6月	源氏物語人々居所	-#	15世紀	_	東海大学桃園文庫	
	9月	源語図集	-#	_	斎藤彦麿	川越市立中央図書館	

続いて中近世の『源氏物語』注釈書の中で,有職故実の記述を先駆的に考証し,近世を通じて規範にされた 14世紀『河海抄』,15世紀『花鳥余情』の建築・装束の記述を抽出し、データ化した\*33注2。

さらに『源氏物語』を中心とした平安文学に関する有職故実書を調査し、本研究の資料とした(表 1-1)。

以下では,調査で得た資料を中心に,分析を進める。

#### 3. 『源氏物語』に示された住宅像

『源氏物語』に示された住宅は、平安貴族の理想的住宅として、日本住宅史研究に引用されてきた。それは、天保13年(1842)に成立した『家屋雑考』に遡る<sup>文4</sup>。同書には、「『源氏物語』梅が枝の巻に、七間のしんでん廣く大きにつくりなしなどもみえたれば、七間四面は、中古以来通例の間敷と見えたり」とあり、また「放出」「納殿」「塗籠」「船」「四阿(アツマヤ)」「長局」の解説において、『源氏物語』から記述を抜粋している。

戦前の研究では,前田松韻『寝殿造の考究』が「平安時代後期の寝殿造」の中で,藤原頼通の邸宅・高陽院とともに『源氏物語』の二条院・六条院をとりあげ,登場人物の居所について解説する<sup>文 5)</sup>。ただ,春の町の東対に住んだ紫上を西対に居住したとし,描かれた六条院も概念図に留まっている。その後,太田静六『寝殿造の研究』は<sup>文 6)</sup>,『源氏物語』本文の記述を抜粋し,六条院・二条院の作図化を試みている。

池浩三は、太田静六案と国文学における玉上琢弥案を元に、母屋・廂、塗籠、庭の植栽や雑舎を含めた復原案を提示しており、今日における六条院研究の終着点として位置づけられている<sup>文7)注3</sup>。その中にあって、太田静六・玉上琢弥・池浩三案には細かな相違点も指摘されている<sup>文8)注4</sup>。そこで、本研究は、本文の記述から、六条院・二条院の概要を検証することから開始した。

(1) **六条院** 六条院は、光源氏とその女性たちの住まいであり、「少女」に造営の記述が登場する。春・夏・秋・冬の四町から構成されていた。

**辰巳**(春)の町 寝殿に源氏が住み,東対に紫の上,寝殿の東面に明石姫君が住んだ。後に寝殿の西面に女三宮が住むようになる。源氏の没後は,寝殿に二宮,東対に女一宮が住んだ。築山が高く,春の花の木を植え,前裁に,五

葉・紅梅・桜・藤・山吹・岩躑躅を植えた。

丑寅(夏)の町 花散里と婚姻前の夕霧が住んだ。後に 西対に玉鬘が住み,源氏の没後は夕霧が伝領した。泉が あり,前栽には呉竹・卯花の垣根・花橘・撫子・薔薇・ くたになどを植え,馬場殿があった。

未申(秋)の町 秋好中宮の里内裏であり,元々の小高い所を築山に,紅葉の植木を植えて、滝を落とした。

**戌亥(冬)の町** 明石君の住まいであり,垣に松の木・ 菊の籬・柞原・深山の木を植えた。冬の町には寝殿はな く,大きな対が二つあった。また御倉が立ち並んだ。

六条院では、四季折々の行事が催された。その具体的 記述を、建築・しつらい・作庭に着目して、まとめる。

「行幸」(藤裏葉)神無月の20日あまりに、帝・冷泉院が六条院に行幸した。未の刻を下る頃に春の南の寝殿に移った。反橋・渡殿に錦を敷き、外からあらわになる所に軟障を囲んだ。東の池に舟を浮べて、鵜飼を放つ。春の町から秋の町の山の紅葉が見えるように、中の廊の壁を崩して中門を開いて御覧になった注5)。

「源氏の四十賀」 (若菜上) 春の御殿の寝殿の西の放出 に源氏の御座をしつらい,源氏の四十賀を催した。屏 風・壁代など新調し、御地敷四十枚・御褥・脇息などを しつらえた。螺鈿の御厨子二具に,御衣箱四つを添え,夏 冬の御装束・香壺・薬の箱・御硯・泔坏・搔上の箱など を用意した。御挿頭の台は、沈・紫檀を作り、珍しい模様 を彫り、金具の色使いなども、目新しいように、工夫した。 「女楽」(若菜下)正月20日ばかり,春の御前の梅も盛 りに咲き, 霞が立ちこめている。 廂の間の御障子を全て 放って御几帳だけを隔てにして,中の間は源氏の御座と した。玉鬘腹の兄君に笙の笛,左大将の御太郎に横笛を 吹かせて, 簀子に控えさせる。内には, 褥を並べて, 明石 の御方に琵琶,紫の上に和琴,女御の君に箏の御琴,三の 宮には,手馴らした琴を整えた。この際,女三宮が桜の細 長,明石女御が紅梅の御衣,紫の上は葡萄染と思われる色 濃き小袿に薄蘇芳の細長、明石御方は柳の織物の細長に 萌黄色と思われる小袿に羅の裳をひきかけた。平安時代 の歌合装束を意識し,赤(女三宮・明石女御・紫上)と 青(明石御方)の対比で女楽を彩った点が、この装束描 写の特徴としてあげられる<sup>文9</sup>。

『源氏物語』の住文化の特質とは、建築単体だけではなく、庭の前栽、室内の調度、登場人物の装束を含めた、全体を総合しての演出がなされた点である。

(2) 二条院 二条院は、源氏が母親の桐壺更衣の邸宅を伝領し、六条院造営以前の源氏が居住し、西対に紫の上が居住した。 六条院造営後は、紫の上の別邸となるが、その後に匂宮が伝領し、西対に宇治の中君を迎えた。 二条院東院は、西対に花散里、東対に明石君、北対を細かく分けて、末摘花・空蝉君が居住した。 寝殿は空けておいて、源氏の居所とした。 源氏没後は、花散里が居住する。

### 4. 室町期の注釈書に示された寝殿造像

『源氏物語』に示された住宅は、中近世から現代に至るまで研究が蓄積されてきた。しかし、個別の研究の際に、先行研究の誤りを指摘するに留まり、研究史の全体像を明らかにしたものは少ない。

そこで本研究は、『源氏物語』における有職故実の基礎を築き、近世を通じて典拠となった、『河海抄』『花鳥余情』に着目する。 六条院は、その典拠が『宇津保物語』に登場する四季の庭を持つ種松の長者邸にあるとされるが、これを解釈したのは『河海抄』である。

従来の研究として、平山育男は、中世から近世後期の『源氏物語』の注釈書 16 件を対象に、物語冒頭の「桐壺」所収の建築用語を抽出し、中近世における研究の深化の過程を明らかにしている<sup>文 10)</sup>。また、「帚木」「空蝉」の舞台となった紀伊守邸の復原を試み、近世には、室町後期『花鳥余情』の「障子は寝殿の母屋の南面と北おもてとをへたてたる障子也」とする解釈が浸透していたことを指摘する。この点について平山は、国文学の先行研究を引用し<sup>× 11)</sup>、母屋の南北を区切り使用する構成は、室町における住宅建築にあり、平安時代には母屋を南北に区切る例はみられない。従って『花鳥余情』は同時代の室町期の住宅から解釈を試みたものとする。

しかし、『花鳥余情』に示された住宅像全体に関する研究はみられない。また、『花鳥余情』は前年代の注釈書『河海抄』を批判的に継承して制作したと序文にあることから、双方の比較もまた必要であると考える。

### 4.1 四辻善成著『河海抄』にみる寝殿造像

(1)成立 『河海抄』は、四辻善成 (1326~1402 年) が足利義詮に献上した『源氏物語』講釈 20 巻で、中世以来の『源氏物語』注釈を集大成したと位置づけられる<sup>文 12)</sup>。とりわけ、出典考証を徹底しており、背景となる歴史事実を読み解く準拠論を主張した。「物語の時代は醍醐・朱雀・村上三代に准ずる歟」とし、この時代の枠組から物語を理解しようとする姿勢を通したとされる。

『河海抄』の建築に関する用語には、地誌的な情報などもあるが、ここでは、建築の形態に関わる記述に絞る。 (2)内裏 内裏については、承久3年(1221)順徳天皇著『禁秘抄』を中心に、『職員令』『日本紀』『延喜御記』等からの引用がみられる。

例えば、夜の御殿では「夜御殿清凉殿ニあり四方ニあり妻戸南ハ大妻戸一間也御帳同清凉殿東、御帳の南西北に畳をしきて女房の坐トス見建暦御記」(桐壺)とする。 (3) 六条院 二条院 六条院・二条院については、物語上の記述を、歴史資料と照らし合わせ、解釈している。

二条院東の院の寝殿を空けて源氏の休息場にした記述 については、「寝殿は妻室の居所也、源氏未其仁なし仍さ るやうありてふたけすとある敷、礼記日聘則為妾註日 (中略) されは紫上も猶妾之義歟仍寝殿に居せさる歟」

(松風) とし、源氏は正室を迎えておらず、紫の上は妾であるか。 しかしなぜ寝殿に居住したのかと説いている。 これについては後述する『花鳥余情』が批判している。

さらに、玉鬘が住んだ夏の町の西対を、「礼記云夫人上 髽帯麻于房中注日房中則西房也天子諸侯有左右房者也 案之、女は必西に居住すへき故ある歟」(玉鬘)同様に 『礼記』を引用し、女性は西に住むべきであり、それ故、 玉鬘も住んだのか。としている。

薫が二条院で休息をしようとした場所「きたおもて」では、「北面は女房の居住すへき方なり、きたの方なといふも此故也、内々の方といふ心なり」(宿木)と解釈し、北面を女房の居住する所としている。

(4) しつらい しつらいは、『新儀式』などを典拠に以下のように解釈する。帝の御手による、漢詩文か和歌が書かれた御屏風四帖を「新儀式云注母屋四間副北障子立淳和御手跡御屏風三帖御帳東立同御屏風一帖御賀天皇御算所」(若菜上)とし、前例をあげている。

#### 4.2 一条兼良著『花鳥余情』にみる寝殿造像

(1)成立 『花鳥余情』は,文明 4年(1472)に一条兼良(1402~1481年)により記され,後に後土御門天皇に献上された。序文には,『河海抄』の「残れるをひろひ、あやまりをあらたむる」と記されるが,注釈の方法は異り、歴史考証より物語上の文意・文脈を明らかにしようとする態度に立つとされる<sup>文12)</sup>。この点については,建築の描写も同様で,『河海抄』が住宅の構成を歴史資料と照合するのに対し,『花鳥余情』は物語に書かれた描写をより具体的・視覚的な姿で復原しようと試みている。(2)内裏 「桐壺」清涼殿東廂における光源氏元服儀式では,『河海抄』が清涼殿東廂の解釈であったの対し,『花鳥余情』では,以下のように,光源氏の元服儀式に踏み込んだ解釈をしている。

「西宮抄一世源氏元服(御装束同親王儀但源氏座在孫 庇西面北上前置円座其下置理髮具入柳筥)引入着座召源 氏着召蔵人置理髮具理髮被召着円座(入巾子候便所)引 入着座引入退冠者下(於下侍改着黄衣)」

(3) 六条院 二条院 六条院・二条院においても、『花鳥 余情』は、物語上の寝殿造の構成を踏まえた解釈がなさ れている。

内裏と朱雀院を経由した男踏歌が六条院に参上する場面で「左右の対,渡殿などに部屋を設けて」という記述に対し、「寝殿の東の対,にしのたい,又ひたりみきのすきわた殿などを,さじきにかまへられたるなり」(初音)とし,具体的な寝殿造像を提示している。

前述した『河海抄』が記す、紫の上は妾扱いであるのになぜ寝殿に住んだのかという記述に対しては、「河海 之説あやまれり、紫の上はもとより<u>六条院</u>の西の対にす

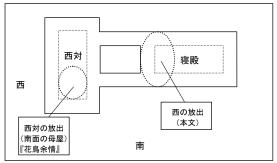


図 4-1 『花鳥余情』の理解の概念図

み給へり、東院のしん殿をは、源氏の御やすみ所に心あて給ふ」(松風)傍線の箇所は、二条院の誤まりであると考えられるが、紫の上が寝殿ではなく西対に住んだことを指摘しており、『河海抄』よりも内容に踏み込んでいる。その他の記述からも、六条院東対に紫の上が住み、女一宮が伝領したこと、源氏の没後に匂宮が二条院寝殿に住み西対に宇治の中君を迎えたことを考証している注(6)。(4)しつらいしつらいについても、「唐東京錦」では、『河海抄』が「唐東京錦也唐にも東西京あり其内東京の錦すくれたる敟」とするのに対して、『花鳥余情』は、「唐東京錦茵藤の円文の白綾方一尺八寸縁白地錦四方二寸許裏蘇芳平絹無縁也」としており、『花鳥余情』は具体的・視覚的な表現で示している。

(5)後世における理解 この中にあって、後世における理解として、「障子は寝殿の母屋の南面と北おもてとの中を隔たる障子也」(帚木)とあり、先行研究で指摘されているように $^{\chi 11}$ 、中世的な空間である母屋の南北を仕切る建築構成を前提とする解釈がみられる。

それは「放出」の解釈からも窺うことができる。

「梅枝」に、「放出」に関して以下のような解釈がある。「<u>放出は、南面の母屋とみえたり</u>。それににしのはなちいてといふは、西の対の放出といふ心なり。(中略)又わかなまいりしにしのはなちいてといへるは、西対のはなち出なり」

「若菜参りし西の放出」は、女三宮の居所を指し、寝殿の西面である。ただ『花鳥余情』は、「放出」を「南面の母屋」と理解したために、寝殿の西の放出を、西対の放出(南面の母屋)と理解している(図 4-1)。

さらに「か〜殿の<u>にしおもて</u>に」「か〜殿の<u>西の対</u>をいふなり」(若菜上)とし、朱雀院の居所・柏殿の西の面を指した言葉を、『花鳥余情』では西対としている。

以上を踏まえると,『花鳥余情』は,寝殿の西側を示す空間を,西対の南側と理解している<sup>注 7)</sup>。これは,殿舎を南北に仕切り,南側をハレの空間として使用する中世的な住宅構成から影響を受けた可能性が考えられる。

『花鳥余情』は、詳細な考証に基づきながらも、例えば「常夏」に登場する六条院の釣殿を、「今案あつき日につり殿に人々すゝみていをなとてうしたる事、この物語に面影たるによりてのするものなり」などの記述がみら

れ,同時代の建築実態や住宅観を通して,『源氏物語』の 世界を理解しようとした背景を窺うことができる。

#### 5. 図に示された六条院

文献上に示された住宅像を作図化した場合に,どのような様相となるのか,調査研究の中で見出した『源氏物語人々居所』(東海大学桃園文庫蔵)『十帖源氏』(国文学研究資料館蔵)を検討する。

### 5.1 『源氏物語人々居所』「六条院図」

(1)成立 本書は、『源氏物語』中の人々の居所を、24 項 にわたって記述する注8。奥書には,「公方(東山殿也) 以御本早写間落字多一校畢」とあり,足利義政所蔵本 (1436~1490) と考えられている<sup>文13)</sup>。後に書かれた補 注は,四条一品(四条隆量在位 1497~1503 年),陰陽頭 在基(賀茂在基在位 1492~1500) のものとされる。住 居とそこに住んだ人物が記されているが,建築の形態は 示されていない。その中で、10項「六条院」に六条院の 邸宅・庭園の位置を示しており、検討する(図5-1)。 (2) 六条院図 本図は,六条院四町の位置と庭について, 「たつみの町」(春)、「うしとらの町」(夏)、「ひつじさ るの町」(秋),「いぬゐの町」(冬)と文字で書かれ ている。春の町に「五葉松」「紅梅」「池 つりとの」 「わたとの そり橋」,夏の町に「くれ竹のかき」「泉あ り」「卯花」「木たかき松」「菖蒲をうへたる」秋の町 に「もみちの山」「いつみやり水」,冬の町に「み山 木」「菊のまかき」「松はゝそをうへらる」,春と秋の 町の間に「へたて小山」「池 中嶋 藤・山吹をうへら る」と書かれており、春・夏・秋・冬にまつわる庭への 関心が窺える。物語本文を辿って, 東西南北の方向を踏 まえて.紙面上に文字をプロットしたものと考えられる。 中央には、「南の寝殿」とあり、「一のたい」「二の 対」「東の放出」「東おもて」「女三の宮の御方」「明 石中宮御方」と六条院春の御殿の記述がある。また、う しとらの町に「もとの文殿,にしのたいに玉鬘尚侍すみ 給」と書かれ,文殿を空けて,玉鬘が夏の町西対に住んだ ことを踏まえている。ただ、補注と考えられる「一の対 私云ク柏木右衛門□スミシ所也如何」「二の対 私云女 三宮スミシ所也如何」については誤認である。柏木は父

#### 5.2 『十帖源氏』六条院図・二条院図

(1)成立 『十帖源氏』は野々口立圃(1595~1669)が記した『源氏物語』の梗概書で版本として流布した<sup>文 14)</sup>。本書末尾の古系図の後に六条院図・二条院図がある<sup>注 9)</sup>。(2)六条院図 図には(図 5-2)、東南に「源氏」、西南に「秋好中宮」,西北に「明石上」とあり,東西南北の登場人物の居所は,本文と一致する。しかし,東北にある

である太政大臣の邸,女三宮は寝殿の西面に住んだ。

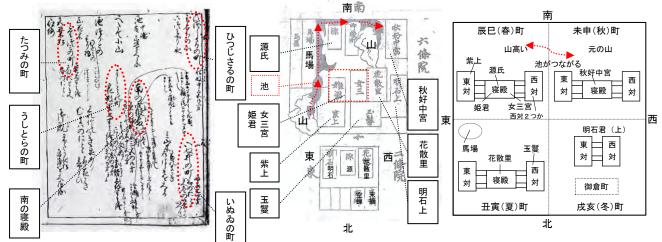


図 5-1 『源氏物語人々居所』 (参考文献 13)から転載) (東海大学桃園文庫蔵)

図 5-2『十帖源氏』 (国文学研究資料館蔵)

図 5-3 六条院概念図(本文から作成)

べき花散里の住まいが、図では西に寄せられている。

北側には、紫上・姫君・女三宮・玉鬘の住まいが書き こまれている。実際には、紫上・姫君・女三宮は源氏と ともに、辰巳の町、東南に居住していた(図 5-3)。しか し『十帖源氏』は、女性達の住まいを源氏からは別居さ せ、敷地の北側に描いている。

この中で、寝殿の東面に住んだ姫君、寝殿の西面に住んだ女三宮の二人を、隣同士に描き、寝殿の東対に住んだ紫上の居所を、東側後方に位置づけており、本文の記述を踏まえた可能性がある。いっぽう、夏の町西対に住んだ玉鬘の居所は、花散里の居所より、西側に位置づくべきだが、明石の居所があって遮られてしまっている。このように、考証を試みているものの、平面のプランに落としこんだ時に矛盾が生じている。

さらに、庭の描写をみると、築山と池が描かれている。 西南の秋好中宮の邸宅前には、元々小高い山があり、滝・池を造ったが、これに一致している。また、北東には、涼しげな泉・馬場殿があったが、源氏の住まいの隣に、「馬場」と書かれた一角があり、対応している。しかし、春の町の東南にあった高い山が、図では北東にある。紫上の御前に山を描くことを優先したためと考えられる。

この中で、紫の上の御前から、秋好中宮の御前まで、池が繋がっている。これは「胡蝶」に書かれた六条院春の町での船楽において、秋の町の中宮の女房達が竜頭鷁首の船に乗り、池づたいに秋の町から春の町へ移動する本文を根拠としている可能性がある。鑑賞者が本図をもとに、六条院の華やかな生活をイメージしたと考えられる。(3) 二条院図 六条院の下には二条院の図が掲載される。中央に源氏、西に花散里、東に明石と書かれている。 さらに北には、末摘花・空蝉の居所があり、「松風」に記された二条院東院を示したものと考えられる。寝殿を空けて源氏の居所とし、西の対から寝殿の渡殿にかけて花散里の居所や家司の詰所、東の対は明石の御方の住まいを予定に、北の対は特別に広く造って、心をかけた女性を住

まわせるように仕切りを設けた。図には「末摘」「空蝉」と あり、本文によく沿っているが、その中にあって、相互を繋 ぐ渡殿は描かれていない。

以上のように、17世紀までの『源氏物語』の住宅考証は、寝殿造の構成である、寝殿と対からなる構成が描出できていない。しかしながら、そこには春夏秋冬の植物に囲まれた庭、池・築山での遊興など、当時の人々の『源氏物語』に書かれた住生活への憧憬を見出すことができる。

#### 6. 松岡行義の考証研究と図面・絵画の導入過程

### 6.1 江戸後期における平安文学の図説化

18 世紀後期になると,有職故実学の隆盛の中で,『源 氏物語』などの平安文学を図説化した書物が登場するようになる。この時期,言葉だけではもはや具体的にイメ ージできなくなった平安文学にあらわれる様々な事物 (装束・調度・建築等)を,絵画を添えて視覚的に解説 しようとする動きが活発となった。

平安文学の図説を試みた書として、『源氏装束図式文化考』(国文学研究資料館初雁文庫蔵)『源語図式抄』 (大阪府立中之島図書館蔵)がある。両書は、享保 2 (1717)年刊行『源氏男女装束抄』に触発されて著され、前者はこれを批判的に、後者はこれに追従する形で著されている<sup>×15)</sup>。

『源氏装束図式文化考』の跋文には、『源氏男女装束抄』に装束図が呈されていないことを問題視して、この書を著したという経緯が記されている。18 世紀末から19 世紀半ば頃までは、平安文学の図説が隆盛したことが指摘できる。本稿は、その中でも、住宅・装束について、詳細に検討した松岡行義著『源語図抄』及び『源氏類聚抄』に着目する。

### 6.2 『源語図抄』の成立

(1) **松岡行義** 松岡行義 (1794-1848) は, 松岡辰方の長男で, 和学講談所を設立し, 幕府の保護の下『群書類従』を

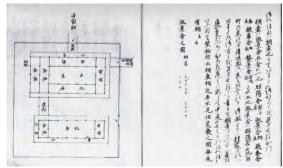


図 6-1 『源語図抄』 (宮内庁書陵部蔵)

編纂した塙保巳一の学派に位置づけられる。高倉流公家故実,小笠原流武家故実に学んだ。多くの文献資料を渉猟したが,実技を重視し,絵画・遺品の調査,復原も試みたとされている $^{^{\chi_{16}}}$ 。著作には,有職故実を詳細に記した『後松日記』がある $^{^{\chi_{17}}}$ 。

(2) 成立 『源語図抄』 (宮内庁書陵部蔵) は, 『源氏物語』の冒頭「桐壺」に登場する, 建築・調度・装束・儀式・位階などの用語を, 文献・絵画・図面により考証した 1 冊よりなる<sup>注10</sup>。

序文<sup>注 11)</sup>を要約すると、『源氏物語』に関わる注釈は数多くあるが、それを図に示したものは少ない。そうした本があれば、女子が見るのにも便利であり、装束の色や文様、調度の形、建築のつくりなどを図に写していたが、後々に間違いが指摘されることを恐れ、公開しないでいた。山本正臣<sup>注 12)</sup>に頼まれて、図を譲ったが、正臣が老い病に臥してしまった。その後、これを欲しがる人々が多数いたことからここにまとめた。弘化 4 年(1847)6 月、松岡丹治行義。

『源語図抄』については、従来に、国文学分野からの紹介があり、19世紀における国学の隆盛を背景に、『源氏物語』を歴史として読解する傾向が高まり、その時期に有職故実の観点から制作されたものとする $^{2}$  18)。しかし、その全容を検討した研究はみられない $^{2}$  19)。

(3) 内容 『源語図抄』に示された項目は,60 項程あり, 各項目と典拠とした文献・図面・絵巻物を抽出した。

物語本文の用語を 1 語 1 語とりあげて考証する点は、 前述した『源氏物語』注釈書、『花鳥余情』などの形式 を継承するが、情報量の点において、大きく異なる。

「桐壺」では、前掲の『花鳥余情』では、「淑景舎をきりつほといふ五舎の一なり此桐壺は御殿よりうしとらのはてにあたりて」と桐壺の方角を記す。いっぽう『源語図抄』では、『禁秘抄』に記載される「桐壺桐近年不見但荒廃之間毎庭桐有」を引用し、寛政度内裏復古造営に関与した裏松固禅の編纂『大内裏図考証』\*20)に所収された淑景舎の平面図を掲載する(図 6-1)。

「打橋」では、『花鳥余情』に記述はなく、その後近世 初期の注釈書『岷江入楚』には「切馬道に板を打ち渡し て通う道」と記す。いっぽう『源語図抄』では、「打橋



図 6-2『源語図抄』 (宮内庁書陵部蔵)

は板を打ち渡し橋をいふなり,其渡廊なき所にかかるなり」と説き,『山塊記』『玉海』『年中行事春日祭』

『枕冊子春曙抄』に記述があるとし、渡殿又渡廊ともいい、往来しない時は屏風障子などの調度を立て、女房の局として住む事もあったと記す。さらに、「春日験記一巻」「打橋之図」と題し、『春日権現験記絵』『年中行事絵巻』に描かれた打橋・渡殿・渡廊を掲載している(図 6-2)。

清涼殿東廂での源氏の元服の場面では、『倭名類聚抄』『拾芥抄』から清涼殿を解説し、『新儀式』『西宮記』の一世源氏元服の記述を抜粋し、清涼殿の舗設図を掲載し、そこに元服座、また加冠をした後に源氏が装束を換えた下侍の位置に印を書き入れている(図 6-3)。さらに、帝の座る椅子を図示し、源氏の童子の際の髪型・装束を考証し<sup>注 13) 文 21)</sup>、「冠者座」「引入座」について『新儀式』『西宮記』を元に解説している。

さらに各項目には、筆者である松岡行義による割注が あり、絵画・図面により考証している。

「弘徽殿」では、「裏松家の図考証にみえたり、便にしたがうなり」とする。「鴻臚舘」では、朱雀大路を中心に、東鴻臚舘、西鴻臚舘を配置図で示し、「舘中のさし図詳らかならず」とする。「御橋」では、「清涼殿の東西の御階南北二所にあり、三級欄なし、前に石橋あり」とあり、「承安五節絵 御階」から階に石橋が架かる絵を載せる(図 6-4)。このように、絵画や図面を加えることで、視覚的な理解を示そうとしている。

## 6.3 『源氏類聚抄』への展開

さらに松岡行義の著作には、『源氏類聚抄』(宮内庁 書陵部蔵)が現存しており、以下、検討する。

(1)成立 『源氏類聚抄』 (宮内庁書陵部蔵) は, 『源氏物語』「桐壺」「帚木」「空蝉」「夕顔」「若紫」「末摘花」に登場する, 建築・装束・調度などの記述を考証した 4 冊よりなる<sup>注 14)</sup>。

『源語図抄』が「桐壺」だけを対象とするのに対し、 『源氏類聚抄』は、「末摘花」まで記された。ただ終盤 には項目だけを記し、空白の頁が散見され、草稿本であっ た可能性がある。示された項目は、127項目ある。

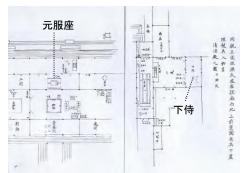


図 6-3『源語図抄』 (宮内庁書陵部蔵)

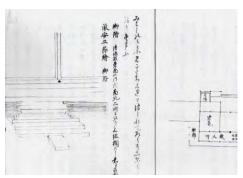


図 6-4『源語図抄』(宮内庁書陵部蔵)

序文を要約すると<sup>注 15)</sup>,過去の優れた人々が記した注 釈の中には,建築の形・装束の色合・調度に関する記述 が少ないが,その形を具体的に知ることにより,物語に書 かれた言葉と心情を明らかにすることができる。内裏の 図は裏松固禅による図面を援用し,もとの書を見てただ 写したものもある。松岡行義。

このように、裏松固禅著『大内裏図考証』から、ただ図を引用したものもある、と記されている<sup>注16</sup>。

(2) 内容 『源氏類聚抄』は、『源語図抄』と同様に、物語本文を抄出し、歴史資料・物語の引用、図面・絵巻物で編纂される。その中で『源語図抄』が、女御更衣等の位階、元服等の儀式など、多様な項目をとりあげるが、『源氏類聚抄』の記述は、建築・調度・装束に絞られており、全体に整備がなされている。さらに、『源氏類聚抄』は典拠とした資料の情報量が増える。

「桐壺」では、『源語図抄』は、『禁秘抄』を引用するが、『源氏類聚抄』では、『倭名類聚抄』『拾芥抄』『日本紀略』『玉海』『枕草子』を加え、五舎が摂政の直盧として使用された点を記す。

「打橋」では、『源語図抄』が、17 世紀の北村季吟の 注釈書『枕草子春曙抄』を引用するが、『源氏類聚抄』 は「枕草子巻六」と記載し、原典に立ち戻ろうとする。

「後涼殿」では、『源語図抄』は、『延喜雑式』『日本 紀略』に記述がみえるとする。いっぽう『源氏類聚抄』は、『源語図抄』が記した典拠に加え、『西宮記』『倭名 類聚抄』『拾芥抄』を増やし、文末に「曹司」「上局」という新たな項目を独立させる。

「朝かれい」では、『源語図抄』は、『禁秘抄』 『禁腋 秘抄』に記述がみえるとし、「禁腋秘抄朝餉之間」の図

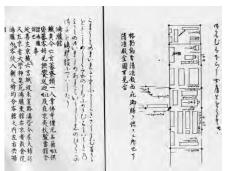


図 6-5『源氏類聚抄』(宮内庁書陵部蔵)

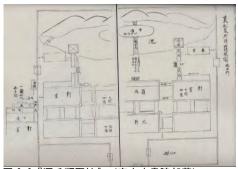


図 6-6『源氏類聚抄』 (宮内庁書陵部蔵)

を掲載する。その中で『源氏類聚抄』は、『江家次第』 『侍中群要』を加え、「禁腋秘抄朝餉之間図」の後に、 「按朝餉ハ清涼殿西北御膳ヲ供スル所也、下清涼殿全図 可見合」と総括している(図 6-5)。

以上を総合すると、『源語図抄』が制作された後に 『源氏類聚抄』は成立した可能性が高い。いっぽう、図 面の向き、しつらい・文字を描くかどうかは異なる点も みられ、『源語図抄』から『源氏類聚抄』へ直写したも のではないことを補足する<sup>注17)</sup>。

### 6.4 『源語図抄』『源氏類聚抄』の絵画・図面

『源氏類聚抄』の序文には、内裏の図は裏松固禅の史料に寄ったとあるが、『源語図抄』『源氏類聚抄』に所収された図面・絵画をまとめると、表-6-1・2になる。

所収された図面の多くが、『大内裏図考証』からの引用であり、裏松固禅の研究成果を重要な根拠とすることで制作されたことが分かる。また『源氏類聚抄』には、 裏松固禅の貴族邸宅の研究成果『院宮及私第図』<sup>文 22)</sup>が引用される。

「帚木」紀伊守邸では、『院宮及私第図』から図面を引用し、「類聚雑要抄母屋大饗、室礼指図、定家卿京極第図(明月記二拠りテ裏松入道殿所作図也)、裏松家所傳寝殿図両中門図」を掲載している(図 6-6)。割注には「寝殿ノ制當代ニョリ又人ノ心二随カハレリ、今悉ニココ二載セス」と記している。

「帚木」における『院宮及私第図』所収の両中門図は、 『源氏類聚抄』の他の項目において引用される。「対」 では「対は寝殿に対してつくりたる屋也、箒木寝殿図可 見合」、「中門」では、「按二箒木しんてんの図可見合」 とある。行義は、裏松固禅の研究を学び、それを活かした。 絵巻物は、『年中行事絵巻』『承安五節絵』『なよ竹 物語絵巻』『石山寺縁起』『春日権現験記絵』など、原 本が15世紀以前に制作された絵画を採用する<sup>注18)</sup>。

文献資料は、『河海抄』などの14世紀の資料を下限とする。この場合、『源語図抄』『源氏類聚抄』に引用された文献は、『大内裏図考証』に所収された膨大な引用文献とはそのまま一致せず、自らの関心に基づいて選択された可能性が高い。随所には、文献を引用するだけではなく、自説が割注としてふされている。

『源氏類聚抄』には、「妻戸といふは寝殿のつまにある戸ひらき戸なり、こうしはおろしぬればやすく上かたし、されば夜ふかきに多くつま戸を用ゆ、又つまならず中にあるひらき戸をつま戸と云ならはせり、渡廊のひらき戸もつま戸といふ、中古はひらくにひらき戸の事となりて、はしの間をもつま戸にする也、紫宸殿の図及夜御殿又今のはるところの図に見合を考べし」とある(図 6-7)。

松岡行義の記した『後松日記』をみると<sup>\*17</sup>,「妻戸といふはひらき戸なり。殿の端にある故妻戸とはいふなり。しかるを,今は殿の面の中の間につくるなり。その名ゆへなきに似たり。夜など出入せんには,格子を上んは便なければ,妻戸を用うべし」とある。

「対」「格子」「打橋」「馬道」などの用語においても、『後松日記』と『源氏類聚抄』の理解は共有されている。このように、『源語図抄』『源氏類聚抄』の絵画・図面は、裏松固禅周辺からの図面を大部分で引用したが、随所には自説を活かした。

表 6-1 『源語図抄』所収の図面・絵画一覧注25)

	史料 番号	項目	典拠
	3	桐壺	淑景舎之図桐壺(大内裏図考証3-10)
	7	馬道	馬道之図(大内裏図考2-292,428)
	8	後涼殿	後涼殿之図(大内裏図考証2-234)
	10	内蔵寮	内蔵寮之図(大内裏図考証3-200)
	16	弘徽殿	弘徽殿(大内裏図考証2-428)
大	17	壺前栽	清涼殿御壺(大内裏図考証2-115)
内裹	18	弘徽殿の上御つほね	弘徽殿の上御局(大内裏図考証2-131)
図考	20	夜御殿	夜御殿之図(大内裏図考証2-112)
証	28	藤壺	飛香舎藤壺(大内裏図考証3-32)
	33	南殿	紫宸殿之図(大内裏図考証2-36)
	34	穀倉院	穀倉院在所図(大内裏図考証3-364)
	35	御座殿	清涼殿之図付鋪設(大内裏図考証2-75)
	53	左馬寮	左馬寮之図(大内裏図考証3-346)
	54	蔵人所	校書殿内(大内裏図考証2-249)
絵巻物	4	打橋	春日験記一巻打橋之図
	5	渡殿•反渡廊	年中行事画巻
	35	御座敷	年中行事画巻
	55	御階	承安五節絵 御階

表 6-2 『源氏類聚抄』『源語図集』所収の図面・絵画一覧<sup>注 25)</sup>

表 6-2	『源E	5類聚抄』『源語	図集』所収の図面・絵画一覧 <sup>注 25)</sup>		
	史料 番号	項目	典拠		
	1	桐壺 淑景舎	淑景舎之図 五分一丈(大内裏図考証3-10)		
	3	渡殿	昭陽淑景渡廊之図(大内裏図考証3-8,2-377)		
	4	馬道	雲図抄五節事 馬道東西柱打灯階燃付立床子昇 真上 舞妓出入道、馬道之図2図(大内裏図考2- 292,428)		
	5	後涼殿	後涼殿之図五分一丈(大内裏図考証2-234)		
	7	上局	清涼殿上局之図(大内裏図考証2-85)		
	9	内蔵寮	内蔵寮之図(大内裏図考証3-200)		
	12	弘徽殿	弘徽殿之図五分一丈(大内裏図考証2-428)		
	15	夜御殿	夜御殿之図ー寸一丈 清涼殿身書御座ノ北二有り (大内裏図考証2-75)		
	16	朝餉	清涼殿朝餉の間(大内裏図考証2-131)		
	17	鴻櫨舘	鴻櫨舘(大内裏図考証3-259)		
	18	藤壺 飛香舎	飛香舎之図(大内裏図考証3-32)		
大	19	南殿 紫宸殿	紫宸殿之図(大内裏図考証2-36)		
内	20	穀倉院	穀倉院之図(大内裏図考証3-364)		
裏図	21	御座殿 清涼殿也	清涼殿之図也(大内裏図考証2-75、2-158)		
考証	29	左馬寮	左馬寮之図(大内裏図考証3-346)		
п	30	蔵人所	校書殿内蔵人所之図(大内裏図考証3-346)		
	34	内匠寮	内匠寮之図(大内裏図考証3-206)		
	36	殿上	殿上(大内裏図考証2-127)、承安五節絵		
	46	几帳	類聚維要抄云三尺几帳一本、枕几帳二本(四 図)、洛東清水寺什物後水尾院御几帳之図(二図) (大内裏図考証2-167)		
	62	屏風	類聚雑要抄云五尺屏風十二帖(大内裏図考証3- 467)		
	87	御帳	類聚雑要抄 御帳一基 方八尺、同土居、同帳懸帷様(大内裏図考証2-163·164·167)		
	98	御湯殿	御湯殿図(大内裏図考証2-157)		
	108	内教房	内教坊之図(大内裏図考証3-207)		
	106	褥	類聚雑要抄 唐錦茵一枚裏濃打物(大内裏図考証 3-463)		
	121	鏡臺	類聚雑要抄 鏡筥(大内裏図考証2-169)		
私院 第宮 図及	48	寝殿	類聚雑要抄母屋大饗、室礼指図、定家卿京極第 図、裏松家所傳寝殿図両中門図(院宮及私第図)		
	2	打橋	春日験記巻一(巻1-8紙)		
	22	椅子	承安五節絵巻物殿上御椅子図		
	31	御階	承安五節絵清涼殿御階之図		
	43	壁	画子草子絵(絵師草子第1段)		
	47	脇息	春日験記脇息之図(巻3-4紙)、鳴門少将脇息之図(不明)		
絵巻	50	格子	春日縁記格子之図(巻3-2紙)、鳴門少将格子之図 (なよ竹物語絵巻紙35紙)		
物	51	障子	鳴門少将障子之図(12紙)		
	52	燈籠	鳴門少将燈籠之図(35紙)		
	54	長押	春日験記(巻3一2紙) 上長押 下長押		
	59	簣子	承安五節絵清涼殿東簣子		
	61	妻戸	鳴門少将繪妻戸之図(曇華院本4段)、春日験記巻 三(2紙)		
	69	半蔀	(町屋の半蔀の絵 年中行事絵巻巻13-9紙)		
	70	檜垣	鳴門少将檜垣之図(15紙)		

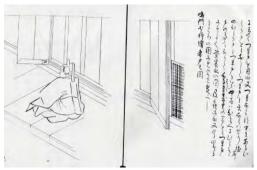


図 6-7『源氏類聚抄』 (宮内庁書陵部蔵)

### 6.5 『源語図抄』『源氏類聚抄』の装束

さらに、『源語図抄』『源氏類聚抄』の装束の記述を 検討する。『源氏物語』に示された装束関係の記述は、 前述した 15 世紀の『源氏物語』注釈書である一条兼良 著『花鳥余情』に豊富な言及がある。

その中で『源語図抄』『源氏類聚抄』は、『花鳥余 情』を網羅し、さらに多くの項目を加えている。

『源氏類聚抄』「紫苑色」「薄色」「山吹」「今様色」は、一条兼良著『桃花蘂葉』を引用し、また「黄生単袴」は、兼良著『女官飾抄』を引用している。しかし、『源氏物語』注釈書である『花鳥余情』の引用は避けている。また「紫苑色」「薄色」には、『物具装束抄』『三條家装束抄』などの装束書を引用しており、さらに多くの装束書を博捜したと考えられる。

行義の装束に対する理解の方法は、『花鳥余情』をは じめとした『源氏物語』の注釈書や装束考証書を起点と するが、自ら原典に立ち戻り、多くの事例を集めて論究す ることが窺える<sup>注19)</sup>。

また,行義には,装束の具体的な姿を示そうとする姿勢がみられる。『源氏類聚抄』では「褶」「簪」「皮衣」「衣筥」に私案に「その製未知」としているが,例えば『源氏類聚抄』の「白大褂(うちかけ)」には,「白大褂一重」が禄として記録された元服に加えて,他の行事,さらには『和妙類聚抄』を引用し,「褂」について考察し,「按褂ハ衣也裁縫衣ニ同シ」とする。行義は,衣服の形や使用例などの具体的な形態に関心が高いことが窺える。

行義著『後松日記』「柳営服御巳下之論」<sup>\*17)</sup>には、 行義は高倉家に師事したが、衣紋道を司る高倉・山科両 家の姿勢を批判し、古い書物を自ら見て、探求することに 重きを置いている。その基本となる書物は、「国史令 式」(『続日本紀』『日本後紀』『延喜式』『衣服令』 等)・諸家の日記・『西宮記』『雅亮装束抄』『飾抄』 などであることを述べている。これらの資料は、『源語 図抄』『源氏類聚抄』にも数多く引用されている。

このように、建築の記述と同様に、行義の装束に対する 考証態度は、行義著『後松日記』を踏まえることで明ら かにすることができる。

### 6.6 松岡行義『源語図抄』『源氏類聚抄』の制作意図

行義著『後松日記』「源氏物語を解す事」には、『源氏物語』の注釈には誤りが多くそれが人の心を妨げている。「公の宮殿, 私の寝殿, 対の様, 恒例臨時の公事, 神事, 仏事, 官位昇進の次第, 職掌, 衣服, 調度(中略)」を正確に解することが必要であると説いている<sup>文17</sup>。

松岡行義は、故実家としての立場から、『源氏物語』の 住宅及び装束などに関する知識、収集した文献・図面・ 絵巻物を編纂することを自らの責務とし、『源語図抄』 『源氏類聚抄』を編纂したと考えられる。その際、歴史 資料や注釈書からできるだけ多くの事例を収集し、丹念 に自らの説を構築した。その際、論理に無理が生じたり、 納得できない場合は、「つまびらかならず」「未知」 「後考をまつのみ」など、謙虚な姿勢を保ち、その究明 に精進した。

#### 7. 『源氏物語』住宅考証書の展開

さらに『源語図抄』『源氏類聚抄』は、『源語図集』 (川越市立中央図書館,三重県立斎宮歴史博物館蔵), 『源氏物語考証釈図』(国会図書館蔵)へと派生する。

### 7.1 『源語図集』の制作と受容

(1) 成立 『源語図集』 (川越市立中央図書館蔵) は、 『源氏物語』「桐壺」「帚木」「空蝉」「夕顔」「若 紫」「末摘花」に登場する建築・調度・装束を主題とす る絵画・図面を集めた 1 冊で<sup>注 20)</sup>、絵画・図面が中心で、 文字は各内題に記される程度である。

冒頭には、「斉藤可怜彦麿集」と書かれ、「衛居文庫」 印がある<sup>注 21)</sup>。奥書はない。いっぽう、同じ内容の書が 三重県立斎宮歴史博物館に所蔵される<sup>文23)</sup>。

その奥書には注 22),『源語図集』の原本は,斎藤彦麿が描いたもので,それを川越の山田衛居が秘蔵したものを,作絵したとある。川越市立本は,斎藤彦麿(1768~1854)周辺で制作され,斎宮歴博本は,山田衛居の元から借り出され,その周辺で写されたものと考えられる。

(2)内容 『源語図集』には、「淑景舎」「打橋」「渡殿」「渡廊」「馬道」と続き、図面・絵巻物が掲載される。所収された図・順番を検討すると、『源氏類聚抄』と一致し、『源語図集』は、『源氏類聚抄』から文献を省き、図面・絵画を写した書と考えられる(図 7-1)。斎藤彦麿は、石見浜田藩士で、江戸派の国学者賀茂季鷹に入門し、有職故実を伊勢貞丈に学んだ。古典文学の絵画化に強い意欲を持っていたとされ<sup>24</sup>、『国学者伝記総覧』には、『勢語図抄』(享和元年(1801)制作)、『枕草子図抄』を制作したとある<sup>25</sup>。

彦麿が『源氏類聚抄』を入手した経路は、明らかではないが、『貞丈雑記』の巻末に、斎藤彦麿と松岡明義(行義の息子)の名が共に記される<sup>文26</sup>。行義・明義、彦麿



図 7-1 『源語図集』 (川越市立中央図書館蔵)

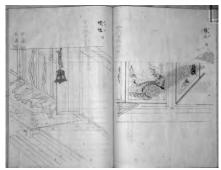


図 7-2『源語図集』 (三重県立斎宮歴史博物館蔵)

は,江戸に在住した国学者であり,幕府に仕えた国学者間で,制作・派生したものと考えられる。

山田衛居(1849-1907)は、菊池容斎に絵を、国学を平田篤胤の孫・延胤に学んでおり、川越氷川神社の神官となった<sup>文 27</sup>。『橿原宮御即位大禮図』『氷川神社行幸絵巻』などの絵画を制作した、画家でもあった。山田衛居の日記『朝日之舎日記』には、衛居が斎藤彦丸(麿)の孫・斎藤成之の元へ度々訪れ、彦麿の手入本を購入していたことが記載されるが<sup>文 28</sup>)、『源語図集』もこの際に写されたものと考えられる。日記には衛居が『中殿御会図』を作図し、『蒙古襲来絵詞』『伴大納言絵巻』などの絵画の模写を借りたことが記載されている。ここでは、『源語図集』は、画家が参照した画像集として機能した(図 7-2)。

#### 7.2 『源氏物語考証釈図』の制作

『源氏物語考証釈図』(国立国会図書館蔵)は、『源氏物語』「桐壺」に登場する,建築・位階・儀式・装束・調度などの記述を考証した2冊,60項目程からなる。 序文には,柞園主人有住斉が記すとあり,松岡行義の『源語図抄』を典拠としたとある<sup>注23)</sup>。

所収された図・絵画を検討すると、『源氏物語考証釈図』は、基本的に『源語図抄』をもとに、増補されている。その中で、『源氏物語考証釈図』は、近世の『源氏物語』注釈書『岷江入楚』『源氏物語新釈』『玉の小櫛』、有職故実に関わる『後松日記』「松岡辰方先生口授」など文献資料の引用が増加する。『源語図抄』に書かれた松岡行義の割注も引用し、「源語図抄云」とある。

『源氏物語考証釈図』は、『源語図抄』に近世に制作された注釈書などの文献史料を増補した。この中で、装

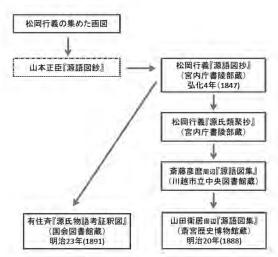


図 7-3 本稿対象の『源氏物語』住宅考証書の制作概念図

束に関する絵画も多数加えられていることは,固有の制作背景によるものと考えられる<sup>注 24)</sup>。

その後、『源氏物語考証釈図』の図面・絵巻物は、国文学者島津久基(1891-1949)の著した『釈評源氏物語講話』にみられる<sup>文29</sup>。

以上より、一連の『源氏物語』考証書の成立と展開について、試みに概念図を作成すると、図 7-3 のようになる。

### 8. おわりに

本研究は、『源氏物語』の舞台である古代寝殿造の空間が、中近世を通してどのように理解されたのか、中近世における『源氏物語』の住宅考証史を通して明らかにする。『源氏物語』の住宅考証史には、各々の時代の人々が規範とし、理想とした寝殿造像と当時の住宅史研究の水準がよく示されているといえる。

1) 文献上で寝殿造の考証を試みた,14 世紀『河海抄』15 世紀『花鳥余情』に着目すると、『河海抄』は住宅・し つらいを歴史資料と照合した。さらに,『花鳥余情』は 住宅・しつらいを具体的な姿で復原しようと試みた。そ の中で,殿舎を南北で分化した同時代の建築的理解に基 づき,寝殿の西側を指す空間を西対の南側と捉えている。 2) 15 世紀『源氏物語人々居所』及び 17 世紀『十帖源 氏』は、六条院図の制作を試みる。『源氏物語人々居 所』は、方位を踏まえ、物語の言葉を紙面に落としこんだ もので, 六条院の春夏秋冬にまつわる折々の前栽や築山, 池などに対する関心が見いだせる。『十帖源氏』は、物 語本文をもとに、住宅の考証を試みたが、 寝殿と対から なる構成を理解できず、プランに落とした際に、矛盾が生 じた。いっぽう,図に示された様相からは,庭の池・築山 を描き,物語に書かれた,池づたいを舟に乗って移動した 描写が辿ることができるなど, 当時の人々が『源氏物 語』の住宅にこめた憧憬が見いだせる。

3) 18 世紀後半から 19 世紀の有職故実の隆盛により,平 安文学の図説が活発化する中,『源氏物語』の住宅考証 書が制作された。松岡行義による『源語図抄』『源氏類 聚抄』は、多くの文献資料を博捜し、さらに裏松固禅『大 内裏図考証』『院宮及私第図』に依拠することで、寝殿 造像の視覚的理解を可能とした。また、装束の考証にお いても具体的な理解を目指した。

4) 松岡行義の著作は、その後『源語図集』、『源氏物語 考証釈図』に派生し、近代以降の国文学研究にも散見さ れるが、今日の研究にはほとんど参照されていない。

本研究で検討した『源氏物語』の住宅考証史において 19世紀は,転換期に位置づけられる。寛政度内裏平安復 古造営を担当した故実家裏松固禅の研究が成立し,それ まで曖昧であった寝殿造像が明確になる。そこで松岡行 義は,固禅の研究に依拠することで,『源氏物語』の住宅 考証に視覚的史料を導入し,建築・調度に加え,儀式次第 や装束を含めた源氏物語世界を具体的に甦らそうとした。

『源氏物語』は古代貴族文化の象徴・規範として、中 近世にわたって読み継がれたが、その物語の舞台となっ た寝殿造の空間も、中近世の人々の規範や憧憬の対象と して、当時の古代寝殿造観の形成に影響を与えてきた。

『源氏物語』に示された住宅を日本文化史に位置づける際,古代における意義だけではなく,中近世における受容史の展開も重要な側面である。今後は,各年代において造営された建築・庭園の実態も踏まえ,検討したい。

<謝辞>川越市立中央図書館、京都大学文学部図書館, 宮内庁書陵部,国会図書館,東海大学桃園文庫,三重県立 斎宮歴史博物館榎村寛之氏にご高配を賜った。

**<研究協力者>** 磯辺美奈,河野祐美,千葉弥生,山崎朱 加希 (お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科生活文 化学講座)

### <注>

- 1) 参考文献 2)を使用し、『源氏物語』(建築 1023 語・装束 330 語)『宇津保物語』(建築 398 語・装束 304 語)『栄華物語』(建築 613 語・装束 336 語)『枕草子』(建築 351 語・装束 152 語)を抽出した。その結果、『宇津保物語』には、三条大宮第・三条京極邸などの住宅が詳細であり、『栄華物語』『枕草子』は、基本的に当時の実態を基にしており、歌合や出産などの記述が豊富であることが分かった。データは今後の研究に活かしたい。総数は、担当者の定義による所が大きい。建築は赤澤・装束は森田が担当した。
- 2) 参考文献 3)を使用し、『河海抄』 (建築 244 語・装束 368 語) 『花鳥余情』 (建築 180 語・装束 436 語) を 抽出した。建築は赤澤・装束は伊永が担当した。
- 3) 『源氏物語』の住宅は、京都市風俗博物館、宇治市源氏物語ミュージアムに復原模型がある。池案を基にした京都市風俗博物館には、春の御殿の 1/4 の模型、調度・人形の装束を含めた復原がなされており、一部には原寸大の展示がある。宇治市源氏物語ミュージアムには、六条院四町の 1/100 の模型があり、12 世紀『源氏物語絵巻』を基にした原寸大の模型もある。源氏物語ミュ

- ージアムの模型は、池案とは、春の御殿の西対の構成が 異なる。池案が春の御殿を西対二つを横に配置するが、 宇治市源氏物語ミュージアムは縦に配置している。
- 4) 参考文献 8)の中で,浅尾,山崎・片桐が指摘している。 玉上案は『源氏物語』の本文を重視し、池案は他の貴 族住宅との比較や実際の建築構造を踏まえている。
- 5) 参考文献7)至文堂が復原図を掲載している。
- 6) 「東の対の南のひさしのかたなり,むらさきのうへのすみ給ふかたなり」(若菜上)「六条院のみなみのまち也にほふ宮のもとすみ給し所なり,六君も六条院にすみ給ふなり」(宿木)「二条院の東の対を中宮の御休所にせるなり寝殿にならへて東につくれり,化門南階なとありこなたとは寝殿なり紫のうへすみ給ふ」(御法)」「女一宮は東宮と御一腹むらさきのうへにやしなはれ給て六条院の東のたいにその世の御しつらひあらためすゝみ給へるなり」(匂兵部卿)「あかしの中宮の御事也匂宮は二条院にすみ給ふ,女一宮は六条院のはるのおとゝにすみ給ひ,二宮もおなし寝殿にすみ給ふなり」(匂兵部卿)「二条院の寝殿ににほふ宮はすみ給ふ、中の君は西の対にすみ給へるよしみえたり」(宿木)などがある。
- 7) ただ「梅枝」に「東の中の放出」と書かれた箇所は、紫の上の居所である東対を指しており、『花鳥余情』も「東の対の母屋なり」と解釈している。「東の中」が対を示すものか、今後の課題としたい。又「面(おもて)」の解釈にも諸説ある(参考文献11)。
- 8) 『源氏物語人々居所』(東海大学桃園文庫蔵),1 冊、 縦 26.7cm×横 21.5 cm。
- 9) 本稿は万治4年(1661)刊,国文学研究資料館初雁文庫蔵 を対象とした。
- 10) 宮内庁書陵部には、3 冊が所蔵され、完本 1 冊、簡略した書、図を省いた書がある。 伝本は京都大学文学部に所蔵。本稿が対象とした完本は、『源語図抄』 (宮内庁書陵部蔵)縦 26.9×横 19.4cm。 なお、『源語図抄』 (写) (京都大学文学部図書館蔵)は、縦 26.8×横 18.8cm。
- 11) 「光源氏のものがたり、呉竹のよゝにもてあそひて、みやひをこのむたねとなれは、河海花鳥をはしめ、比注抄を書給へるも、浜の真砂の数しらすなむありけるされは、はかなき女子達の見給ふるにも便ありて〈中略〉中頃山本正臣思ひたちて、おのれにいひあはすいとよき事なめれば、書さしたるをもゆつりしか〈中略〉弘化四年む月の事なむ、松岡丹治行義」(全文は参考文献12を参照)
- 12) 山本正臣は,山本清渓 (1754~1823) 大炊御門家臣下近 江守で『源語図鈔』12 巻を記したとあるが,管見の限 り現存しない (参考文献 25)。
- 13) 『源語図抄』『源氏類聚抄』は、『花鳥余情』を起点としながら引用はせず、『新儀式』『西宮記』『北山抄』『江家次第』などの原典を記して自ら再検討する姿勢が窺える。源氏の童時の装束は、『花鳥余情』の示す「赤色闕腋袍」の根拠として『雅亮装束抄』巻二「わらは殿上のこと」をともにとりあげる。また、元服後の源氏の無位の黄袍は、『源語図抄』『源氏類聚抄』では引用文献・検討内容に相違があるものの、自論を展開しようとする。また、『源語図抄』「童装束之図」「緋綾葵紋」や『源氏類聚抄』「浅黄綾」「表小葵綾」など図示する意図は、装束でも窺える。
- 14) 『源氏類聚抄』 (宮内庁書陵部蔵) 4 冊同型で縦 26.9 ×横 19.4cm。筑波大学 1 冊、東海大学桃園文庫 1 冊, カルフォルニア大学バークレイ校 (三井文庫旧蔵) (源氏物語中大内調度織文図彙と題する) に 1 冊が所 蔵される (参考文献 12)。さらに『国書総目録』をみ ると,無窮會に 4 冊がことが分かる。本書の周辺につい ては、加藤悠希氏にご教示を得た。

- 15) 「このものかたりの注抄なとにいてきて、いえいえの説いと多かり、みなことのはの心をときあるは、管くらゐのきさみ公事の次第なと、かしこき人々の書置たるなれは、万にたらひてなにをかはことさらくはえむさはあれと、公私のとのつくり、ころもの色あひ調度のかたちなとは、もれにける思ふに、そのいろかたちもしらて、心詞共のあきらかならむやかゝるによて〈中略〉大内の図は多く、裏松入道固禅かゝせ給へる書ふりらつせり、又此書にひき、用ひしをもとの書をはえ見てたゝにいれたりもあり、丹治行義選」(全文は参考文献12を参照)
- 16) 参考文献 19)では「もとの史料」が『源語図抄』である可能性が高いとしたが、現在は文章の前後関係を踏まえると、裏松固禅の図を見てただ引用したとする方が正しいのではないかと考えている。
- 17) 例えば「左馬寮」の図では、『源語図抄』が配置図・平面図を俯瞰的に描くが『源氏類聚抄』は部分をとりあげている(参考文献19)。
- 18) 参考文献 22) 岩間香は、『院宮及私第図』所収の絵巻物は、主題とした年代が9世紀から12世紀のものを選択したとする。『源語図抄』『源氏類聚抄』も同様である。また『院宮及私第図』と同じ『なよ竹物語絵巻』曇華院本を『源氏類聚抄』も使用するなど、絵巻物と図面を一緒に行義が入手した可能性がある。加え、19世紀に流布した絵巻が、限定されていた可能性がある。
- 19) 装束色については重ね色目のような私的な色より令式 に定められた公的な色に強い関心が窺える。松岡行義 の装束に対する考証は、稿を改めて報告したい。
- 20) 『源語図集』1 冊 (川越市立中央図書館蔵) 縦 27×横 20cm。
- 21) 川越市立中央図書館には,川越氷川神社の宮司で日本画家であった山田衛居の文庫が所蔵される。
- 22)「この源語図集の原本は、斎藤彦摩呂うし乃手づから書たるものなり、其書るよしは記されど、ろうしの筆にはまこふへくもなし、然るを川越なる衛居山田氏、いつの頃か、あがなひ得てひめ置れたるを、乞請て写せしは、玉の舎のあるじ作絵なり、此時明治十二年九月上院」
- 23)「たまたま後松先生の源語図抄なれと,はつかに二巻にしてそもまた全からすよて,時らけくをさまるみよの光りをしるへに,くらきまなこをするするふるき画まきともより,こゝかしこたちきるなるは、識者のなみおける鳥の跡をたとりさくりて,釈図をものさんとおもひ起しつれと」。(参考文献 12 を参照。同書が載せる「有佳斎」は,正しくは「有住斎」と思われる。
- 24) 有住斎には、『類聚婚礼式』等の著作がある。
- 25) 番号は、頭から便宜的に記しており,全項目は参考文献 19)を参照。『大内裏図考証』は、『故実叢書』明 治図書出版,1951年から,巻数-頁を示した。

# <参考文献>

- 1) 源氏物語千年紀展,京都文化博物館,2008。源氏物語の1000 年,横浜美術館,2008,源氏物語-千年のかがやき:国文学研究資料館,2008,三田村雅子:記憶の中の源氏物語,新潮社,2008 等,中近世の源氏物語絵に描かれた住宅像の変容をまとめたものに、赤澤真理・石黒久美子・土屋貴裕:物語絵を通してみた近世における上流階級の住宅観に関する研究-一連の源氏物語絵を中心に一,住宅総合研究財団研究論文集,32,pp.165-176,2005.3 (赤澤真理:源氏物語絵にみる近世上流住宅史論,中央公論美術出版,2010)
- 2) 源氏物語 1~6: 新編日本古典文学全集, 小学館, 1997 枕草子: 新編日本古典文学全集, 小学館, 1997 栄花物語 1~3: 新編日本古典文学全集, 小学館, 1997 うつほ物語 1~3: 新編日本古典文学全集, 小学館, 1996
- 3) 紫明抄 河海抄,角川書店,1998, 花鳥余情,源氏物語古

- 注集成 1 巻, 桜楓社, 1978
- 4) 故実叢書:明治図書出版,1951
- 5) 前田松韻:寝殿造の考究,建築雑誌,491,pp.1-38,1927.
- 6) 太田静六:寝殿造の研究,吉川弘文館,1987
- 7) 池浩三:源氏物語その住まいの世界,中央公論美術出版,1989。池浩三編:源氏物語の鑑賞と基礎知識―空蝉 ―,至文堂,2000。源氏物語 六条院の生活:光琳社出版, 1998 源氏物語の地理:思文閣出版,1999
- 8) 浅尾広良:『源氏物語』の邸宅と六条院復元の論争点, 王朝文学と建築・庭園,平安文学と隣接諸学 1,竹林 舎,pp201-226,2007,山崎裕子・片桐正夫:『源氏物 語』にみられる六条院邸宅に関する考察,日本建築学会 学術講演梗概集(東海),pp61-62,2003
- 9) 森田直美: 六条院女楽の色彩 赤青対比の身分的倒錯が 意味するもの - 、瞿麦,第17号,pp17-26,2004.6
- 10) 平山育男:「中河のわたりなる家」復元考,源氏物語の 鑑賞と基礎知識―空蝉―,至文堂,pp79-88,2000.6, 平山育男:寝殿造と現代,講座源氏物語研究第9巻源氏 物語と現代文化,おうふう,pp304-329,2007
- 11) 石田譲二:源氏物語の建築,源氏物語論集,桜楓 社,pp368-375,1971,増田繁夫:源氏物語の建築,平安 文学研究,51,平安文学研究会,pp367-386,1973
- 12) 伊井春樹:源氏物語注釈書·享受史事典,東京堂出版, 2001
- 13) 寺本直彦:源氏物語受容史論考続編, 風間書房, 1983
- 14) 吉田幸一:絵入本源氏物語考:青裳堂書店,1987, 清水 婦久子:近世源氏物語版本の挿絵,講座平安文学論究八 巻,風間書房,1992
- 15) 森田直美:近世後期における平安朝物語の図説化— 装 東関連の書を中心に —,国文学研究資料館紀要文学研 究篇,第 37 号, 2011. 3 刊行予定
- 16) 加藤悠希: 有職故実家松岡行義の邸宅に関する知識について, 日本建築学会計画系論文集 631, 2008, 1961-1967, 歴史人物事典: 朝日新聞社, 1994, 国学者伝記集成, 名著刊行会, 1972
- 17) 日本随筆大成,吉川弘文館,1977
- 18) 重松信弘:源氏物語研究叢書Ⅱ増補新攷源氏物語研究 史,風間書房,1980,加藤悠希:『家屋雑考』の流布と 「寝殿造」の定着過程」日本建築学会計画系論文 集,646 号,2701-2707,2009.12
- 19) 赤澤真理:19世紀における『源氏物語』住宅考証書の 成立と展開-『源氏物語』の考証研究にみる寝殿造理 解の研究(1),日本建築学会計画系論文集651号, 1209-1217,2010.5 (赤澤真理:源氏物語絵にみる近世 上流住宅史論,中央公論美術出版,2010) に詳細を掲載。
- 20) 『故実叢書』明治図書出版、1951年。內藤広前編纂。
- 21) 伊永陽子: 平安時代の童の正装,王朝文学と服飾・容 飾,平安文学と隣接諸学9,竹林舎, pp. 204-224, 2010
- 22) 藤田勝也編:「院宮及私第図」の研究,中央公論美術出版,2007
- 23) 絵巻を創る-絵師の目でみる源氏物語のおもしろさ, 斎宮歴史博物館,2001
- 24) 片桐洋一·山本登朗, 鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊, 八木書店, 2002
- 25) 国学者伝記集成,名著刊行会,1972。
- 26) 故実叢書,明治図書出版,1952
- 27) 川越学事始め,川越市立博物館,1995, 川越の人物誌第 2集,川越市教育委員会,1986
- 28) 山田衛居:朝日之舎日記-川越氷川神社祠官山田衛居 日記集-,川越市総務部市史編纂室,1979
- 29) 島津久基: 釈評源氏物語講話, 中興館, 1940

#### <執筆分担>

6-1 森田直美, 6-5 及び注 13)注 19)伊永陽子, 森田・伊永の教示を得て,全体を赤澤真理が執筆した。